

# RIICC Newsletter



Osaka Jogakuin (Wilmina) University  
Research Institute of International Collaboration and Coexistence

大阪女学院大学 国際共生研究所 <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/RIICC>  
540-0004 大阪市中央区玉造2-26-54 e-mail: riicc@wilmina.ac.jp

April 15, 2011

・ 巻頭エッセー「小学校英語必修化の Backwash」..... 1	・ Project 3 外国人児童生徒のための言語教育モデルの研究..... 3
・ 研究所プロジェクト活動・最近の研究活動紹介	・ 連載シリーズ3「世界の潮流：核兵器のない世界」..... 4
・ Project 1 社会的公正に基づく共生の研究 ..... 2	・ 書籍紹介『国際関係入門 - 共生の観点から -』..... 4
・ Project 2 高等教育における英語教育の方法研究 ..... 2	・ 編集後記..... 4

## 小学校英語必修化の Backwash

智原 哲郎

以下は、今年プロ野球球団日本ハムファイターズに入団した斎藤佑樹投手に関する記事である。

「…地元経済への波及効果にも期待が高まる。市と地元商店街は選手歓迎ののぼり旗460本をつくった。…（2011年1月12日 asahi.com）」（下線は筆者）

斎藤投手が大活躍した場合、北海道地域にもたらす経済波及効果は約52億円に達すると試算されている。このように「波及効果」とは「徐々に広がることで結果的に引き起こされるような効果（実用日本語表現辞典）」を言うが、今春から実施される小学校での英語必修化は日本の英語教育界にどのような波及効果をもたらすのであろうか。

これまで小学校での英語必修化には激しい賛否両論が行き交い新聞・雑誌を賑わせたが、その波及効果の最大の論点は、英語必修化によって(1)児童の英語でのコミュニケーション能力が養われ、中学校以降での英語教育に変化がもたらされるか、(2)小学校教育全体が活性化されるか、であろう。

小学校での外国語活動では「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。（学習指導要領）」ことを目標としている。しかしながら、この目標の具現化に当たった懸念に、小学校教諭が採用時に指導を想定してない英語教育の専門知識・指導法に不案内であることや英語運用能力に不安が残ることを指摘する教育関係者も多い。指導者にこうした英語教育に不案内な状況や英語運用能力に不安がある中で、期待される学習成果が得られるであろうか。ともすれば、「英語嫌い」になる児童を早期に生み出してしまう波及効果が生じる恐れはないであろうか。

また、テストも児童を英語嫌いにさせる波及効果が生じるので行うべきではないとの声もある。Alderson & Wall(1993)は波及効果 (backwash 又は washback) を "the influence of testing on

teaching and learning" と言及している。すなわち、本来、評価内容・方法は教授法の効果や学習の成果を検証するためのものであるが、backwash とは、この順序が逆転した、評価内容・方法が指導や学習に与える影響を言う。

backwash には有害なものとは有益なものが存在する。例えば大学の「英語講読」の授業が「日本語を介さず内容を読み取り理解する」ことを目的としたものであるにもかかわらず、達成度をみるテスト内容が英文和訳のものであれば、学生は授業内容に否定的になり、当初の目的が達成されなくなる。これが negative backwash (有害な波及効果) である。他方、学習成果をみるものとしてコミュニケーション・テストを使用した場合、教員は授業内容をコミュニケーション能力の育成を常に意識して教授し、学生もコミュニケーション能力を高めようと努力する。このように、テストが授業のツールとして機能することによって目指す言語能力の習得につながっていくならば positive backwash (有益な波及効果) が得られる。したがって、小学校においても、テストが指導法や学習成果に影響し、英語学習が小学校教育全体を活性化し、それが子どもたちのためになっていることを確認できるという意味においては、テストは positive backwash をもたらす。

小学校で英語を教える意義があるとすれば、あくまでも中学校以降での英語学習の土台作りであろう。また、英語を言語材料として扱う限り、それは「言語教育」であるべきだ。それには音声だけでなく、文字情報を読み取ることも重要であり、適切な教授法や体系化された授業運営方法の工夫が求められる。いわゆる「お遊び」を中心とした活動に終始すると、子どもには「英語学習＝遊び」という思考回路ができあがり、negative backwash が生じかねない。小学校教育全体の中での英語学習をどう捉えるのか、さらに、小学校→中学校→高校→大学での英語教育の連結を見据えた具体的なシラバスをどう作成するか、など課題が山積している。